

【今号のイチ押し!】 HIV治療の最新動向!
進歩する抗HIV薬、注射による治療も試験段階へ……………1面

【特集】 陽性者の立場からの様々な活動
学会参加報告会、伊勢志摩サミットに向けたアクション…2,3面

【POSITIVE ワイド】 健康と生活習慣
FUTURES JAPAN アンケート結果から……………4-6面

【JanP+の広場】 ジャンププラスからのおしらせ
陽性者によるエッセイ、交流会のご案内ほか……………7,8面

HIV/AIDS 最新動向

国立研究開発法人国立国際医療研究センター
エイズ治療・研究開発センター長 岡 慎一

1996年のHAART療法の登場以降、HIVの治療は年々進歩してきました。服薬の錠数や回数、保存方法、服用するタイミング、そして副作用など負担の少ない薬も次々と登場しています。これからの私たちの治療は、どのように変わっていくのでしょうか？今号では、国立国際医療研究センターおよびエイズ治療・研究開発センターの医師・岡慎一先生に、HIV治療の現在と近い将来についてご寄稿をいただきました。



DTGが最終兵器か？

ドラテグラビル (DTG) は、1日1回の服用で済み、代謝異常を引き起こすこともなく、他の薬剤との相互作用も少ない。また、なんといっても副作用が少なく、食事の影響も受けない。もちろん、治療効果も強力で、多くの薬剤との比較試験で他を圧倒してしまった。合剤であるトリメクを選べば、1日1回1錠で治療は完結してしまう。良いことづくめである。

事実、この1年を振り返って治療を開始したときの治療薬を調べてみると、ほとんどがDTGを含んでいた。今後の治療薬開発も不要になったような勢いである。

しいていえば、トリメクの錠剤が大きいこと、思いのほか見かけ上のクレアチニンの上昇が大きいこと、肝障害を起こす率が臨床試験のデータよりやや高いことぐらいである。当分の間、DTGによる治療が主流であることに異論はないであろう。

新しい治療法は？

今までにない新しいコンセプトで開発の進んでいるのが、半減期の長い治療薬による注射での治療である。

この20年間、HIVの治療は、key drug 1剤とツルバダのような核酸系逆転写酵素阻害薬 (NRTI) といわれる系統の薬剤2剤

の3剤併用で行われてきた。その治療効果が素晴らしかったことはここで説明するまでもない。

しかし、これだけ抗HIV薬が強力になってくると、いつまでも3剤併用が必要かという疑問が生じてくる。

このような考えの中から出てきた治療法が、従来の3剤による初期導入療法と、治療が安定した後に2剤で維持療法をおこなう2段階治療法である。

実は、DTGはもともと血中の半減期が長い、すでに認可済みのリルピビルン (RPV) も同様に半減期の長い薬剤である。

血中のウイルス量が検出限界以下に抑えられた後は、今まではともにkey drugとされてきたこの2剤による注射 (実際には、DTGの半減期をより長いたカボテグラビルという薬剤を用いる) での維持療法ができないかという試みが始まった。現在米国を中心に第2相試験が行われている。いわゆるNRTI spareによる維持療法である。

NRTIの長期的な毒性が問題になっていることからすると、毎日薬を飲まなくてもいいという煩雑さから解放されるというメリットのみならず、長期治療の安全性という面でもメリットがあるかもしれない。

筋肉内注射である以上痛みがあり、病院で受けなければならないというデメリットはあるが、2か月に1回の注射で済みそうであ

る。どちらがいいかは、本人の好みで使い分けていくことになる。治療の選択が広がるという意味では、画期的な治療法である。今後の第3相試験に期待したい。

この注射薬はPrEPにも？

半減期が長いことからすると、予防薬としての使用も非常に魅力的である。PrEPの有効性は、いかに毎日予防薬が飲み続けられるかというadherenceにかかってきた。

2～3か月に1回の注射でHIV感染を予防できるのであれば、本当に魅力的であり高い予防効果も期待できる。実際の使用には、まだまだ課題も残されているようではあるが、その話はまたいずれということにして今回はこの辺で。



岡 慎一氏

HIV陽性者による 第29回日本エイズ学会参加報告会

陽性者3名がそれぞれの学会参加体験を振り返る

2015年11月30日～12月1日に開催された「第29回日本エイズ学会学術集会・総会」に参加したHIV陽性者らによる「HIV陽性者による第29回日本エイズ学会参加報告会」が、2016年2月21日(日)に開催されました。主に国内のエイズ対策に関する最新の知見が発表される日本エイズ学会に実際に参加して学んだHIV陽性者3名からの報告に、来場者30名の方々も熱心に耳を傾けていました。

報告者のAさんは、ご自身の感染が分かる前後の体験や気持ちの振り返り、同じHIVに理解のある友人・知人やHIV陽性者ピアグループとのつながり、学会に参加した経緯に話していました。「“学会”と聞くと、専門家の集まりである、難しい内容が話されている、といった参加のハードルの高いイメージがあったが、参加してみたら理解できるものも多かった」と感想を述べていました。

また報告者のBさんからの報告では、「ふだんは拠点病院でスタッフの方たちに様々な支援してもらっているが、その裏にある努力や研究を知ることができた。自分にも何かできないか」と語り、地元で福祉サービスを取り扱う行政窓口での対応に不手際があったとき

に、自ら職員に改善を求めたという体験を話していました。

報告者のCさんからは、近年エイズ学会でも重要な課題としてシンポジウムや一般演題で取り上げられている薬物依存について、ご自身も使用歴や逮捕などの経験があること、また現在は薬物依存からの回復を支援する活動をしていること等が率直に語られ、「エイズ学会では、HIV陽性者支援という切り口から、多くの方がこの問題について研究したり、正面から取り組んだりしている様子を見て、とても勇気づけられた」と日本エイズ学会について話していました。

日本エイズ学会へのHIV陽性者の参加を促すスカラシップ事業は、HIV陽性者当事者団体・支援団体の協働によるHIV陽性者参加支援スカラシップ委員会により10年にわたって運営されており、今年度からは一般社団法人HIV陽性者支援協会に引き継がれ、この報告会も同法人によって主催されました。今後も多くのHIV陽性者が日本エイズ学会に参加できるよう、スポンサーシップの継続と拡充が望まれます。

※スカラシップ事業については、ニュースレター第26号P.1にも掲載しております。

広島でHIV陽性者交流会を開催!

中四国地域では初開催

JaNP+としては中四国地域で初めてとなる「HIV陽性者交流会in広島」を、2016年1月17日に開催しました。参加者は10名でした(スタッフ除く)。

前回参加者の声(アンケートより抜粋)

- 交流会に参加して、本当に良かったと思います。HIV陽性と、わかってから誰にも告知できずHIVの事での悩み体調の事など通院日に病院に行けば医師や相談室の方がいるから話せるけど身近には話せる人が、いないから、この先どうしたらいいのかなあと不安な日を過ごす事が、あります。でも、今回の交流会で同じHIV陽性者の人達と会って色々話を聞く事ができたり、自分と同じように告知できてない人もいるんだと、自分だけではないんだと知れたり、あまり思いつめないようにしようと思う事が、できました。告知してる人の話も聞いて、その人達みたいに、告知すると気分的に楽になるんだろうなあと。でも、今すぐは、まだ告知する勇気が話を聞けても、持てないので、いつか持てるようになればいいなあと。
- 自分は感染してまだ半年くらいなのですが、感染歴が長い人たちのいろんな経験を聞くことができ、自分にとってはプラスになったと



思います。治療のこと、周りの人達との付き合い方(病気の告知等)参考になりました。

● AIDSが発症してもう一年が来ますが、まだまだ日本では差別や偏見が身近にあるんだと言う事がわかりました。カミングアウトのタイミングだとか仕事の事とか考えなきゃと改めて思いました。今は一日一日大事に生きて後悔しない人生素敵なパートナーと生きたいです。最後にこういう場を作って頂きありがとうございました!

● 大人数だったので話す機会が少なくなりましたが皆さん同じような悩みを持っているだと再確認しました。

● 広島開催が初めてということもあったのか、若干皆さん硬さがあったように感じました(自分を含めてですが)。何回か回を重ねれば、もっとフランクに話せるんじゃないでしょうか?

● 中国・四国地方ではなかなか交流会の実施がないので定期的であればうれしいかなと思います。

次の広島での交流会は、3月に開催を予定しています。詳しくは本紙裏表紙(8ページ)をご参照ください。

GGG+フォーラム開催

安倍総理表敬訪問にJaNP+参加

2016年2月5日(金)、ルポール麹町にて国際ラウンドテーブル「GGG+フォーラム 2016:G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」が開催され(主催:特定非営利活動法人日本リザルツ、一般社団法人平和と健康の会)、JaNP+からは代表の高久が出席しました。この会議には他にも日本政府、国会議員、医療関係者、各感染症患者、各大使館、国際機関、民間企業、NGO、大学関係者や学生など、様々な機関・立場のから約300名が参加、日本がG7に向けて議長国とし果たすべき役割についてそれぞれ意見を表明しました。GGGとは、世界エイズ・結核マラリア対策基金(Global Fund)、Gaviワクチンアライズ、グローバル・ヘルス技術振興基金(GHIT Fund)の3機関の総称。今年5月に行われる「伊勢志摩サミット」に向けて、GGGは日本の感染症対策イニシアチブにとっての重要なパートナーとして、日本にどのような貢献が期待され、協力をさら

に進められるか議論する機会を作りたいとの趣旨で集まりました。

2時間という限られた時間でしたが、エイズ・結核・マラリアの三大感染症、ワクチン予防接種、民間の創薬へさらなる支援、ポリオ根絶、薬剤耐性、そして公衆衛生の危機への対応などに関し、感染症患者・遺族のメッセージも交えながら、日本の「健康の外交」を期待する発言が多く出されました。日本政府の方々からも、サミットに向けて「口も出すが資金も出ていきたい」といった心強い表明もありました。

ラウンドテーブル後、総理官邸で行われた安倍晋三内閣総理大臣表敬訪問があり、HIV患者の立場から高久が同席しました。総理大臣宛て「G7伊勢志摩サミットに向けた要望書」の提出に立ち会いました。



ほぼ満員の300名が参加、様々な立場からの意見が交わされた



古屋範子衆議院議員(公明党副代表)



武見敬三参議院議員(自民党)



牧島かれん衆議院議員
(自民党・内閣府大臣政務官)



逢沢一郎衆議院議員(自民党)



安倍総理表敬訪問では、伊勢志摩サミットに向けて日本のリーダーシップの発揮をうながす要望書が手渡された

[特集] Futures Japan

～HIV陽性者のためのウェブ調査～

日本で初めて実施されたHIV陽性者を対象とした大規模ウェブ調査、第1回目が2013年7月20日～2014年2月25日に行われ、1,000人を超えるHIV陽性者が回答してくれました。

この調査には数多くのHIV陽性者が企画段階から参加しており、1年以上の議論を経て質問項目を決めました。通院、健康状態、周囲の人々との関係、セクシュアルヘルス、子どもをもつこと、福祉制度の利用、心の健康、アディクション(依存症)など幅広い内容になっています。

ここでは、分析結果(913人)の中からいくつかのテーマを選んで紹介していきます。

より詳しくお知りになりたいかたはWebサイトをご覧ください。

(HIV Futures Japanプロジェクト/JaNP+ 矢島 嵩)

Futures Japan～HIV陽性者のためのウェブ調査～ <http://survey.futures-japan.jp/>

第3回 健康と生活習慣

この十数年の治療の進歩により、HIV陽性者の余命はとてども長くなりました。「HIV=死」ではなくなり、HIVを持ちながら長期にわたって生きていくことが可能になったのです。それでは、HIVを持ちながら生きていくというのはどのようなことなのでしょうか。

「Futures Japan ～HIV陽性者のためのウェブ調査～」の分析結果(913人)をもとに、今回は、HIV陽性者が自分の健康や日常生活への影響について、どのように感じているかといったことを中心に見ていきます。

自分は健康？ 健康じゃない？

HIV陽性者は自分の健康状態をどう思っているのでしょうか？ 半数近い人が「よい／まあよい」と回答していますが、「あまりよくない／よくない」も2割います。きちんと比較ができるわけではありませんが、治療方法が確立されていない時代、抗HIV薬の副作用がきつい時代にくらべて、全体的にはHIV陽性者が感じている健康状態も良くなったと言えるでしょう。しかし、今でもHIV関連／非関連のさ

さまざまな理由によって体調が悪いと感じている人はいます。

健康上の理由によって日常生活に影響していることは何かを聞いたところ、「ひとつもない」と回答した人が過半数を占めていました。影響していることでもっとも多かったのは「セックス」で、3割を超え

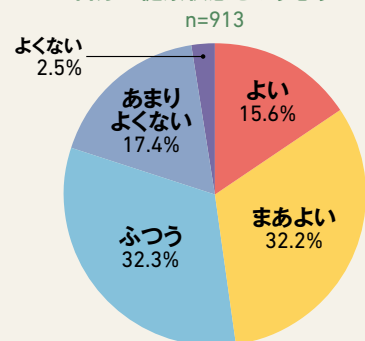
ていました。性感染症であるHIVを持ちながら生きるHIV陽性者の特徴的な一面と言えるでしょう。性生活が日常生活の一部とするならば、QOL(生活の質)に大きな影響が出ていると考えられます。

また、外出、運動、日常動作などに影響がある人がそれぞれ1割程度いることも注目すべきポイントです。「国民生活基礎調査(平成25年)」では70代ではじめて同程度の割合となっているからです。うつなどのメンタルヘルスの悪化や、AIDS発症にともなう後遺症などによって、日常生活に困難を抱えているHIV陽性者が若年～中年にわたり一定数いると考えられます。また、HIV陽性者の高齢化にともなう介護サービスへのニーズは年々大きくなっているため、介護施設・サービス現場での受け入れ拒否などの課題もやはり大きいと言えるでしょう。

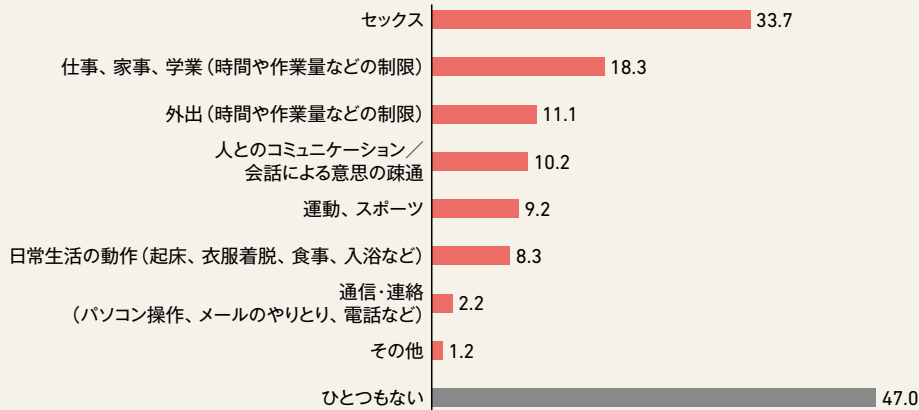
自覚症状については、トップが「体がだるい」30.3%、次いで「肩こり」23.5%、「下痢」22.9%、「眠れない」18.4%、「湿疹・水虫などのかゆみ」18.4%となりました。これは同じ時期に行われた「国民生活基礎調査」とくらべてみると大きく異なります。こうした傾向があることを知らない医療スタッフも少なくないかもしれません。また、別の質問項目では、「医療スタッフに相談したかったができなかった内容」のトップが「体調の悪化や気になる症状・つらさ」でした。こうした自覚症状について、医療スタッフに伝えることができないでいるHIV陽性者も少なくないでしょう。



自分の健康状態をどう思うか

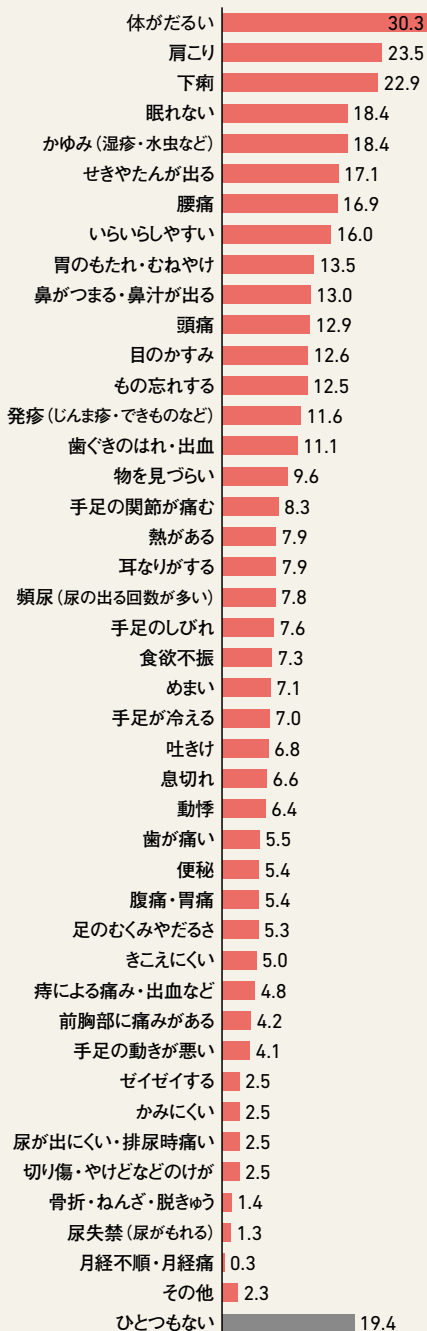


健康上の理由での日常生活への影響 % , n=913, 複数回答



病気やけがによる自覚症状

%, n=913, 複数回答



	Futures Japan	平成25年 一般住民対象の 国民生活基礎調査 (入院中は含まない)	
		男性	女性
1位	体がだるい	腰痛	肩こり
2位	肩こり	肩こり	腰痛
3位	下痢	鼻がつまる・ 鼻汁が出る	手足の 関節が痛む
4位	眠れない	せきや たんが出る	体がだるい
5位	湿疹・水虫など のかゆみ	手足の 関節が痛む	頭痛

HIV以外にもいろいろな病気とつきあっている

HIV陽性者が長く生きるようになり、HIV以外の慢性疾患ともつきあうひとが多くなっています。

この調査では、HIV以外の慢性疾患が[ない]と回答した人が34%に対して、[ある]が64%と多数でした。疾患の種類別でもっとも多かったのは[アトピー性皮膚炎、花粉症などのアレルギー疾患]、次いで[肝炎]、[精神・神経疾患]、[歯や口腔内の疾患]、[高脂血症]、[痔]、[ぜんそく・気管支炎]など、分類された30以上のさまざまな疾患が続きます。2種類以

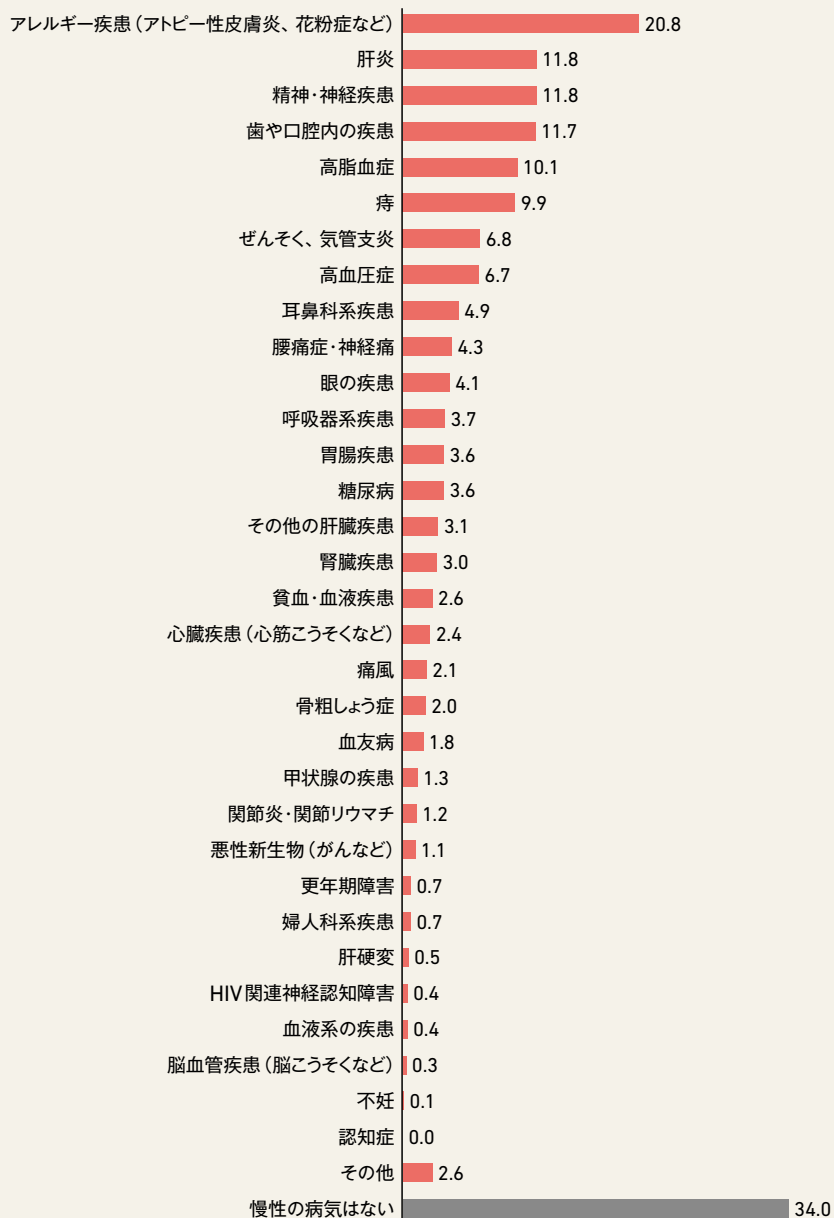
上の慢性疾患を持っている人も36.2%、中には11種類という人もいます。

これらの慢性疾患の種類を見てみると、内科系だけでなく、皮膚科、耳鼻咽喉科、歯科、精神科、眼科、肛門科、整形外科などさまざまな診療科の対応が必要であることがわかります。拠点病院の他科連携だけでなく、クリニックなど一般病院でのHIV陽性者の診療促進が喫緊の課題だと言えるでしょう。



HIV以外の慢性疾患

%, n=913, 複数回答



生活習慣の課題

睡眠、飲酒、喫煙など生活習慣にかかわることにはどのような特徴があるのでしょうか？

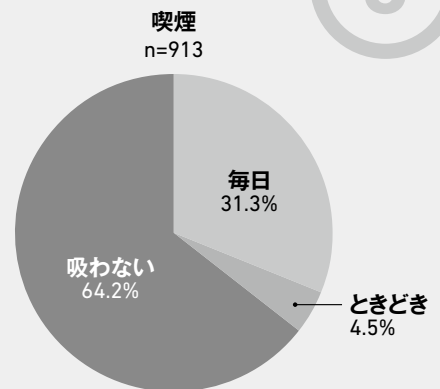
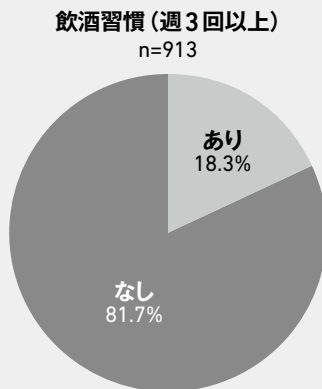
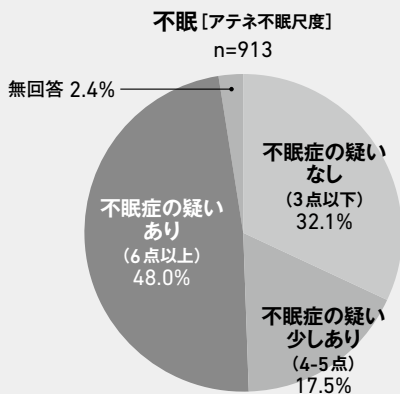
睡眠について国内外で多く使用されている質問形式で聞いてみたところ、[不眠症の疑いがあり]が5割弱で、他の一般住民を対象とした調査と比較しても非常に多くなっています。また、医療機関でメンタルヘルスに関する相談経験がある

人が41.7%、精神科などへの受診経験(過去1年)が24.9%、睡眠導入剤・睡眠剤を服用している人が32.3%となっており、睡眠やメンタルヘルスなどに課題を持つHIV陽性者が少なくないことがわかります。

飲酒習慣の割合は18.3%(男性18.6%、女性11.8%)で、一般住民を対象とした全国調査(男性34.0%、女性7.3%)と比べて、

男性はかなり少ないです。しかし、アルコール依存症をスクリーニング判定する質問では、依存症が疑われる人の割合が全国平均よりかなり高くなっており、ここにも課題が見て取れます。

喫煙の割合は31.3%(男性36.9%、女性8.8%)で、全国調査(男性34.1%、女性9.0%)と同程度でした。



健康のために何をしている？

日頃の健康管理で気をつけていることを聞いた質問では、「食事」が57.6%でトップでした。その他「運動」、「睡眠」、「体重管理」など、HIV陽性者に限らず一般的に良いとされる生活習慣に関するものが多くあげられました。

一方、「抗HIV薬以外の薬剤をきちんと飲む」、「主治医に相談する」「抗HIV薬との相互作用を確認する」など、HIVの治療経験などをきっかけとして行うようになったと思われることもあげられています。

また、約4割の人が「性感染症の感染

やHIV再感染をしないようにセーフターセックスをする」と回答しています。セーフターセックスが、他者への感染防止のためだけでなく、自分自身の健康管理のための行動としても認識されているということがわかります。

健康管理のためにやっていること n=913, 複数回答

食事に気をつける	57.6%	十分に睡眠をとる	38.9%	体重の管理をする	32.3%
抗HIV薬以外の薬剤をきちんと飲む	47.9%	ストレスをためないようにする	38.0%	十分に休養をとる	30.3%
性感染症の感染やHIV再感染をしないようセーフターセックスをする	40.4%	主治医に相談する	37.5%	サプリメントをとる	28.5%
運動をする	39.9%	何か薬を飲むとき抗HIV薬との相互作用を確認する	35.9%	予防接種を受ける	23.5%
		気になる症状があったら早期受診する	32.6%	禁煙	19.9%
				禁酒・飲酒量をひかえる	17.5%
				定期健診・人間ドッグを受ける	13.8%



HIV Futures Japan プロジェクト

HIV陽性者の「自分らしくより健康的な生活の実現」と「暮らしやすい社会環境づくり」を目的としたプロジェクト。多数のHIV陽性者が参加・協力して行われています。



Futures Japan ~ HIV陽性者のための総合情報サイト~
<http://futures-japan.jp/>

列島 西から東から

positive letter

性別、年齢、告知年、居住地もさまざまな
ポジティブの仲間たちからのレターエッセーをお届けします。

忘れずにいたい、感謝の気持ち

スナフキン (男性/40代/中国地方在住/2012年陽性感染判明)

25

感染判明から早いもので4年が経過しました。感染判明後2か月程度入院生活を余儀なくされましたが、当時のことは鮮明に覚えています。発熱と倦怠感で風邪かインフルエンザかなと思い救急外来を受診したのですがインフルエンザではないと言われ、とりあえず薬をもらい自宅に戻るも一週間経っても症状が変わらず、もう一度救急外来を受診し血液検査とCT撮影をしたところ肝機能異常と腹部のリンパ節がかなりの数腫れているので今すぐ入院とのこと。夕方17時に受診して夜中の1時に入院となりました。その後いろいろな検査をしましたが原因特定ができず数日後にHIVの検査をさせてほしいといわれ検査しました。別の部屋に呼ばれ、医師より急性期での感染でありHIV陽性であることを告知されましたがなぜか冷静に受け止めることができた自分がいました。なぜ冷静に受け止められ

たのかは今でもわかりません。ただ、その後も悲観的にならずにいられたのは、20年来つきあっているパートナーのおかげだと思います。彼に感染したことを告げた時、彼は僕のことを責めることもなく、「どんなことがあっても僕は君の味方だから」と言ってくれました。病気のこと、陽性者のブログや支援団体があること、その他いろいろなことを調べて、僕に教えてくれました。感染している僕以上にこの病気について真剣に向き合い、考え、行動してくれたことに感謝しています。僕はそんな彼を見て「これくらいのことでもよくやっていても仕方ない。過去のことより、現在と未来のことを考えて生きていこう」と思いました。その気持ちは今も変わらないし、これからも変わらないと思います。

僕は、本当に幸せだなとつくづく思います。病気になったことは不幸かもしれないけれど、感染の判明も早かったためエイ

ズの発症もなく、治療も早く始められ、薬の副作用もなく、仕事や遊びなど毎日をいきいきと過ごすことができています。学会や陽性者交流会へ参加したことも、その要因の一つです。長い間治療してきた人たちの話を聞くことで、今の自分がどれだけ幸せなのかを実感することができました。やはり経験してきた方々の言葉は心に響きます。その方々に比べたら自分なんて足元にも及ばないと思います。

感染判明前は毎日何気なく過ごしていたのですが、感染判明後にいろいろと気づかされたことがありました。「僕は一人で生きているのではなく、周りにいろいろな人がいるから生きていられるということ」「自分一人では何もできないこと」「仕事ができることのありがたさ」毎日いろいろありますが、「感謝」の気持ちを忘れずに頑張っています。

活動への参加で価値観が変わった

健吾 (男性/40代/愛知県在住/2003年陽性感染判明)

26

感染告知を受けてから、早くも十数年。陽性者支援に携わってきて、7~8年。後半3年は、陽性者のためのコミュニティスペースの代表としても活動をしてきたが、諸事情により、2015年3月をもち、そのコミュニティスペースも休止となり、日常の中にあった僕の中の“HIV”も、何となく一段落したかのように思っていた。

ちょうどその頃、失職してしまい、プー太郎生活へと突入し、人生で初めて失業給付金のお世話になることとなった。元々、半年間は仕事をしないつもりでおり、最初の頃は、ダラダラとした日々を送っていました。また、コミュニティスペースの代表という肩書も取れ、色んな意味で開放感を味わっていた。

陽性者支援で学んだことは沢山あり、僕の人生の価値観や人生観というものを、

大きく変えたと言っても多言ではない。もともと医療従事者であったため、様々な人と接することには慣れていたけれども、仕事とは違った気配りや考え方をしなければいけないと、改めて気付かされた。

そして、環境を変えることは、容易ではない。自分が変われなければ、周囲や環境を変えればい!! が、僕のモットーだった、おいそれと事は運ばず、一年越し、二年越し、いやいや5年越しの取り組みとして必要なことも、多々あることに実感した。

今は、小休止。

次は、僕は何処へ向かっていくのか、もう少しゆっくり、腰を据えて取り組まなければならないだろう。

ただ一つ、続けていることがある。毎年、地方都市で開催される、無料検査会イ

イベントでの、トークショーだ。陽性者として、顔を出し、名前を明らかにして、陽性者であることを伝えたいと、HIVを身近に感じ、最近のトレンドや体験談を語ることで、予防啓発活動である。残念ながら、“イベント”メインで来られる来場者には、あまり興味を引くことができず、ステージ前には、サクラの友人とほんの一握りのオーディエンス。それでもいい。声はいつか伝わる、そう信じて、今年もステージに上がる。

陽性者支援から予防啓発まで、こんなにも振れ幅があるとは我ながら想像はしていなかったが、それでもそこに生きがいを感じて、細々とでも、何かに関わっていききたいと思う、四十路の決意である。

HIV陽性者交流会 in 広島 広島では2回目の開催です

JaNP+は、HIV陽性者のネットワークづくりを応援する交流会を運営しています。この交流会では、お茶やお菓子を囲みながら、少人数で気楽におしゃべりをする時間を提供しています。参加者はもちろん、スタッフも全員 HIV陽性者です（ゲスト講師を除く）。

このたび、広島で2回目となる交流会を企画しました。参加をご希望の方は、JaNP+のWEBサイトよりお申し込みください。

【日時】 2016年3月27日(日) 14:00～16:00

【場所】 広島市内（受付締切後、参加者にのみご連絡します）

【対象】 HIV陽性者 **【会費】** 無料

【申込】 <http://www.janplus.jp/project/interchange>

※準備手配の都合上、開催日の1週間前までにお申し込みください。インターネット環境がない方は、ジャンププラスまでお問い合わせいただくか、医療機関に送付しておりますフライヤーをご利用ください。

ニュースレターでは、 協賛広告を募集しております

JaNP+では、情報提供活動の一環としてニュースレターを発行しています。HIV陽性者とその周囲の方、医療職の方など、HIV陽性者をとりまく多くの皆様に、HIV陽性者の現状や私たちの取り組みをお伝えしています。

協賛広告は1号ずつから承っております。また、掲載箇所および料金についてはご相談に応じます。くわしくはJaNP+事務局までご連絡ください。

発行部数：毎号5000部、WEBサイト上でも公開、

E-mail配信1000件以上

発行日：3、6、9、12月

ジャンプ!交流会 隔月で開催、お気軽にご参加ください

“ジャンプ!交流会”は、HIV陽性者のネットワークづくりを目的としています。会場は飲食店ですが、個室の手配などプライバシーにはある程度の配慮をしています。おしゃべりがメインですので、「気軽な雰囲気、他の陽性者と話してみたい」という方にお勧めです！毎回、10名前後が参加しています。

開催日時や会費等は、回によって多少異なります。くわしくはJaNP+のWEBサイトでご確認ください。お申し込みは、WEBサイトから承っております。

【日時】 基本的に隔月第2土曜日 19:00～（最新情報はJaNP+のWEBサイトでご確認ください）

【場所】 東京都内（受付締切後に、参加者にのみご連絡します）

【対象】 HIV陽性者およびJaNP+の各種会員

【会費】 3,000円～4,000円を予定

【申込】 <http://www.janplus.jp/project/interchange>

※準備手配の都合上、開催日の1週間前までにお申し込みください。インターネット環境がない方は、ジャンププラスまでお問い合わせください。

HIV陽性者のための総合情報サイト「Futures Japan」では、全国各地で実施されているHIV陽性者のグループミーティングや、HIV陽性者のための電話相談、HIV陽性者の個人ブログなどが紹介されています。また、知りたい情報にスムーズに辿り着ける検索機能もあります。ぜひチェックしてみてください。



【WEB】 <http://futures-japan.jp/>



定期的にHIV検査を受けましょう。

GET TESTED FOR HIV.
DO IT REGULARLY.

私たちはHIV領域に特化した製薬企業として、治療の普及とともに予防啓発やコミュニティ活動支援を行っています。

Living Together

ヴィーブヘルスケア株式会社

